

関西大学国文学会彙報

一、平成29年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

平成29年6月20日(火) 二年次生文楽鑑賞教室

（於 国立文楽劇場）

7月15日(土) 第一回国文学会研究発表会（後掲）

10月26日(木)～27日(金) 三年次生宿泊セミナー

（於 高槻キャンパス高岳館）

11月30日(木) 院生合同学術研究会

12月2日(土) 第二回国文学会研究発表会および、

藤田真一教授特別講演会（後掲）

平成30年1月27日(土) 第一回ブレ・ステューデント・プログラム

3月10日(土) 第二回ブレ・ステューデント・プログラム

3月19日(月) 新二年次生対象専修別履修ガイダンス

（国文学会主催ポスターセッション併催）

二、関西大学国文学会研究発表会

◇第一回国文学会研究発表会

日 時 平成二十九年七月十五日(土)午後一時三十分より

会 場 文学部第一学舎 第五号館 E棟 四〇二教室

研究発表

「古事記における「耶」・「哉」・「乎」・「歟」

本学大学院博士後期課程 陳 韻

「吉屋信子『空の彼方へ』における〈久遠の女性〉

本学大学院博士後期課程 木下 響子

「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論—シャーマンのイニシエー

ションの物語—

本学大学院博士後期課程 BERCEA ADRIAN

講 演

「万葉集研究と統計学」 本学教授 村田右富実

◇第二回国文学会研究発表会

日 時 平成二十九年十二月二日(土)午後一時三十分より

会場 文学部第一学舎 第一号館 A三〇一会議室
研究発表

「其蝸庵杜口発句集」について

本学大学院聴講生 奥野 照夫

「谷崎潤一郎「台所太平記」論

—食を媒介とした女中菟吉との交流—

本学大学院博士後期課程 猪口 洋志

「安部公房「事業」論

本学大学院博士後期課程 顧 瑋淵

「今川了俊自筆資料に見られる用字法

—「巖島詣記」の場合—

神戸市立高等専門学校准教授 林田 定男

講演

「俳諧時間論」

本学教授 藤田 真一

三、関西大学国文学会研究発表会 発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

◇第一回国文学会研究発表会（七月十五日）

研究発表

「古事記における「耶」・「哉」・「乎」・「歟」 陳 韻

（本号掲載）

「吉屋信子『空の彼方へ』における〈久遠の女性〉」

木下 響子

（本号掲載）

「宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論—シャーマンのイニシエー

ションの物語」 BERCEA ADRIAN

（本号掲載）

講演

「万葉集研究と統計学」

村田右富実

文学研究とコンピュータはそれほど親和性が高くはないと思われる。たしかに、これまでこの分野において、それほどの成果が上がっているとは思えない。しかし、文学研究が、その表現媒体である文字を使って論文を記述しなければならぬ以上、そこに研究対象と研究媒体との癒着は避けて通れない。この点に無意識だと研究論文という名称の感想文が出来上がって

しまう。この自家撞着を可能な限り避けるため、多変量解析を用いて、万葉和歌の解析を続けている。

今回は、二十巻から成る『万葉集』の巻毎の一般性と特殊性について考えてみた。字余り句を含む歌を除外して、短歌を三一の音の羅列として把握した場合、たとえば、三八八四句存在する初句中、最後の音が「の」の句は一二二一句であり、全体の三一％にのぼる。一方、第二句の最後の音が「わ」は一句しかない。三一の音の羅列はそれぞれにさまざまな特徴があることは容易に推測できる。そこで、これらをすべてデータ化し、Iclass Support Vector Machine と呼ばれる多変量解析の手法と超幾何分布による統計仮説検定を利用して、解析した。

結果、上代特殊仮名遣いを区別しない場合、巻十四（東歌）と巻十六とが一般的ではないことが判明した。巻十六は字音語が多く用いられ、また、一般的とはいえない歌の素材が目立つことは古くから指摘されており、この結果は得心の行くものである。また、特殊仮名遣いを区別した場合についても、同様に解析するとやはり巻十四と巻十六が一般的ではないという結果となる。当時からこの二巻は一般的ではない巻として把握されていた可能性の-high が判明した。そして、それと同時に、巻七、巻十二が過度に一般的であることも判明した。万葉短歌

の典型的な音調は巻七や巻十二によって形成されているといつてよいのだろう。今後、この解析を中古以降の歌集にも応用し、古典和歌全体の一般性について考えてみたい。

なお、この解析結果の詳細は『全国大学 文学・語学』（二〇号／二〇一七年九月）に掲載されている、併読を乞う。

◇第二回国文学会研究発表会（十二月二日）

研究発表

「天理大学附属天理図書館蔵『其蛸庵杜口発句集』について」

奥野 照夫

この小論は神沢貞幹（かんざわさだかみ）（宝永七年・一七一〇生、寛政七年・一七九五年二月十一日没、八十六歳。以下杜口と称する）の発句集について述べたものである。

杜口は江戸時代中期の随筆家で、『翁草』二百巻の作者であり、又俳人でもあった。杜口は十一歳の時神沢家に養子として入るが、杜口に関する資料は『近世畸人伝』（伴藁陰編）か、杜口自筆の『翁草』しかなく、神沢家はともかく、生家の入江家については殆ど判っていない。講談社の『日本人名大辞典』には大坂生まれとある。（墓所は慈眼寺・京都市上京区出水通

七本松東入七番地)

杜口は長じて神沢家の娘と結婚し、二十五歳の頃養父の後を継いで、京都町奉行所東方の輿力となる。二十年程務めた四十歳の時、妻香春院の死の直後、奉行職を養子(末娘民子の夫)に譲って隠居生活に入る。

隠居後、娘一家とは別居し自由に囲碁、俳諧、謡曲、歌舞伎等の趣味を楽しむ。四つの趣味の中でも、十歳の時兄卜志(入江家)の手引きで始めた俳諧を最も好んだようで、終生俳諧を詠みその傍ら『翁草』その他を書く。

杜口の句集としてこれまで知られていたのは、『古希記念集』『ふたりづれ』乾坤(上下)二巻二冊、その付録『やせ牛』で、その中に百二十句餘り、其の他『万国燕』等の句集を合わせ百四十句程が知られていた。

この『其蛸庵杜口発句集』は、杜口七十四歳の時に作られているが、七百五十を超す句が収められており、百四十句の中の重複句、十一句を差し引いて七百四十三句が新しい句である。

句数の多さもさりながら、この『其蛸庵杜口発句集』は珍しく横版で書かれ、又その殆どの句に多くの前書きが書かれているのが大きな特徴である。この前書きには当時の多くの俳人の名前や俳諧活動の様子が、又当時の京、大阪の様子が描かれて

いる。『ふたりづれ』がやや公式な俳諧集であるのに対し、この句集は杜口の私的な日記のようなもので、あまり知られていなかった杜口の素顔がよく判り、これまでの杜口観を変えるものである。ただ、杜口の句風は貞門系の初期俳諧の句風を残しており、風雅な句とは言い難い。句集としては一級とは言えないが、資料としては一級のものと考えている。

「谷崎潤一郎「台所太平記」論―食を媒介とした女中と磊吉との交流」
猪口 洋志

(本号掲載)

「安部公房「事業」論——「私」の事業が拡大しつづける理由について」
顧 瑞淵

「事業」は同人グループ「世紀」でつくったグループ内でのみ流通するパンフレット『世紀群』第四冊目として昭和25年11月頃発表された短編小説である。

「事業」だけでまとめられた作品論がまだなく、これまでの先行研究は主にテキストの一部だけを取り上げ、「私」の言動に注目し、「私」を通してある種の間人あるいは社会に対する批判と捉えてきた。「私」がどうして誰にも止められることな

くその恐ろしい事業を拡大することができたのか、という先行論で注目されてこなかった問題こそが作品「事業」の解明しなければならぬ最大の謎である。

ソーセージの原料がまだ鼠肉だった頃、事業家の「私」は原料のことを世間に隠していた。そして人肉に切り替えてはじめて、原料の秘密が隠せなくなり、「私」の行いは世間の道徳観念と衝突し、反発をうけるようになった。しかし「私」はその政府も動かせるほど経済力で少しずつ社会の仕組み、法律や倫理観などを変えることに成功した。そしてついには人の意思を意のままにコントロールし世界を完全に支配するという恐ろしい目標へ着々と進んでいくことになる。

「私」はどうして誰にも止められることなくその恐ろしい事業を拡大することができたのか。本発表はテキストを最初から考察することによりその問題を解明した。つまり「私」のような権力者の宣伝に惑わされずに、自分の考え、判断基準をしっかりとつものがないためである。そして作者安部公房が小説を通して伝えようとしたのは先行研究が指摘してきた「私」が象徴するある種の人間への批判ではなく、「私」のような人間のことに惑わされることなく自分をしっかりとって、自分で物事の善悪を判断することの大切さであると考えられる。

「今川了俊自筆資料に見られる用字法

―『巖島詣記』の場合―

林田 定男

仮名遣いの歴史を考える際、藤原定家の存在は看過できない。そして、「定家のかなづかい／定家かなづかい」の受容史を探るうえで今川了俊は等閑視できない。了俊は、定家の子孫である冷泉為相・為秀らの歌境を受け継いで冷泉家歌学を体系づけたとされる。また、彼の著作『言塵集』には、定家著『下官集』所載の仮名遣に関する記述が引用されている。

それでは、今川了俊は「定家のかなづかい」を実践したのであろうか。書写資料から特定の人物の用字法を抽出することは困難であるが、書記資料からはそれは可能である。幸いなことに、了俊筆資料には、書写資料（『源氏物語』）のみならず、書記資料（『巖島詣記』）も現存する。

『巖島詣記』では、「いわを（巖）／をがむ（拜）／をなじ（同）」さかむ（境）」「こゑ（越）」などの例が散見された。これらのことから、了俊は「定家のかなづかい／定家かなづかい」を受け継いではいないことが推察される。したがって、『言塵集』の記述は了俊自身の言語活動とは別世界にあったといえる。このことは、歌学における仮名遣いの位置の一面を表しているのであり、後世の仮名遣書の流布の前提となっているといえよう。

さらに、「仮名もじづかい」（異体仮名の使い分け）について、書記資料『嚴島詣記』と書写資料『源氏物語』とを対象に比較調査を行ったところ、主用仮名字体の異なりや使用に偏りの見られる仮名字体の存在が確認できた。異なりの例として「怒／奴」「衣／盈」、資料間で偏りの見られた例としては「者／婦／越」などが挙げられる。また、書写資料にのみ見られる仮名字体「阿／希／遣」などからは親本表記の一端が窺える。それと同時に、書記資料にのみ見られる「日／万／無／羅／恵」などの仮名字体は「個」の用字法のありようを示唆している。

なお、本研究は、JSPS 科件費 JPT1K1800「用字法における個と継承に関する研究」の助成を受けたものである。

講 演

「俳諧時間論」

藤田 真一

いまや「俳句写生論」などと声高に唱えなくとも、生み出される俳句はおのずから「写生俳句」に満ちている。わずかの例外を除いて、流儀・結社を問わず、目にした物事や光景を写し取ることが俳句の常態となっている。たしかに、たかが十七文字の俳句で、微妙な情感や千変万化する風景を描きだすことは難渋する。写生は俳句の宿命ともいえる。

その「写生」を意識的に唱え出したのは、明治の子規にほかならない。かれは写生説をもって、俳句作品を評価する基準にしようと試みた。それに則って、ほとんど忘れられていた蕪村俳句を写生の典型として再評価し、類型的芭蕉流を月並調として退けた。その「写生」をつき詰めてゆくと、目前に見えた物の瞬時を切り取った作となる。

だがその見方は、蕪村論として正当なものだったのだろうか。もちろん蕪村にも、純粹な写生調の作が少なからず存在することとは否定しえない。とはいえ、蕪村の発句を味わうにつけ、むしろ時間的発想に大いなる特徴のあることに気づかされる。その見解は、いみじくも萩原朔太郎によってつとに鋭く指摘されていた（『郷愁の詩人と蕪村』）。

もちろん時間性を生かした発句は、蕪村にかぎらず、芭蕉らの作品にも看取しえないわけではない。表面的にはある一瞬を詠じただけに見える句であっても、そのなかに時間的俳意に裏打ちされていることがしばしばみられる。さらに蕪村にかぎってみれば、新資料の紹介や研究の進展によって、時間性を取りこんだ多様多彩な手法によって、自在な俳句の調べを生みだしていることが感得される。

本講演では、蕪村発句の時間性を大きく三分類（直線性・不

均等な経過性・俳諧的作為性) したうえで、さらにそれぞれを三種に分けて(結果、九種類)、蕪村調俳句を理解することを試みた。そこから、蕪村俳句の特質を分析するとともに、蕪村ならではの新たな妙味が感じられる可能性にふれた。俳句に時間性を組みこむことよって、静止画像に見えたものが動き始め、立体的に見えてくる。そこからある種の“物語”が生まれる契機となることがある。わずか一時間だったが、そうした文学的営為を伝えようと試みた。

四、平成二十八年年度卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇平成二十八年年度 国語国文学専修 卒業論文

〈国文学〉

石川 舞 吉本ばなな「キッチン」論
——恋愛小説としての「キッチン」——

小田 洋介 『台記』にみる男色記事

西村 寛晶 現代におけるヒーロー像

安芸田奈々 中世説話に描かれた飲酒と酒

荒尾 奈々 室生犀星「幻影の都市」論
——構と女性像に見る自伝性——

池端 千夏 百姓狂言盛衰史一考

板野 楓 遠藤周作「砂の城」論
——リルケ「ドゥイノ悲歌」との関わりを中心に——

井田 美鈴 谷崎潤一郎「途上」論
——推理小説作家としての谷崎——

井上 歩 夕霧の元服から見る源氏物語の教育観

上野山愛香 「道成寺」にみる女性像

——『法華験記』から『道成寺縁起絵巻』まで——

梅川 朋子 「職人歌合」にみる性別分業

—女性の役割とその変容について—

梅木 祐輔 梅雨に降る五月雨

—江戸から現代への移り変わり—

遠藤 友紀 川端康成「母の初恋」論

—登場人物から見る川端の恋愛観と願望—

大西 春香 『信貴山縁起絵巻』の復元私案

—源氏物語における女性—六条御息所論—

大西 真子 「孤島の鬼」論—舞台「孤島」の意義—

岡崎 加奈 源氏物語における花散里の存在意義について

岡野絵里子 建礼門院右京大夫集における右京大夫と藤原隆信について

岡村 恭子 朝顔姫君の人物造型

岡本のどか 浄瑠璃比較研究—近松門左衛門と紀海音—

小笠原明穂 谷崎潤一郎「西湖の月」論

—表現方法から読み取る西湖の月—

小野 夏穂 「玉水物語」成立に関する一考察

—異本「紅葉台」との比較を通して—

金園 優美 「文学における狸の活躍」

—いかにして狸のキャラクターは確立したか—

川口 聖平 紀貫之の歌の評価

河内 美穂 志賀直哉『暗夜行路』論

—謙作が乗り越えた運命—

河村 美希 灰谷健次郎『兎の眼』論

—「兎」に表わしているものは何か—

木下由莉華 京極夏彦『姑獲鳥の夏』論

—「どうしようもなさ」について—

木ノ本 哲 西尾維新論—新・西尾維新—

木村 悠花 川端康成『花のワルツ』論

—西洋舞踊に生きる女性の苦悩—

久保上瑠子 『枕草子』における男性貴族の描かれ方

—清少納言の男性観—

蔵本 成美 夢野久作『白髪小僧』論

—失敗作を超えた久作の理想の世界—

黒江 友理 『和泉式部日記』成立事情からみる考察

黒川 夏美 伊勢物語古注に見る「東下り」

香西のどか 『文武二道万石通』『鸚鵡返文武二道』と寛政改革

酒井 郁美 東海道中膝栗毛の笑い

塩屋 円香 『古今和歌集』恋歌の構造から見る「恋」

—巻十五《恋五》を中心に—

白井 美帆 狐と火—「火生土」の観点から—

高橋 香乃 大手拓次詩論—求め続けた真の象徴詩—

高畑 美月 北条政子評価の変遷

龍田 広美 川端康成『川のある下町の話』論
—風俗描写と戦後への想いからみる作品の価値—

北岡 耕平 『今昔物語集』にみる「孝」
—親子関係から考察—

辻川 詩乃 『今昔物語集』に描かれる女たち—浮気する妻—

辻本 愛美 「紫の上」の人物像を紐解く

徳迫 遥 『今昔物語集』に描かれる蛇性

鳥居 恵太 井伏鱒二「屋根上のサワン」論
—「私」とサワン、その孤独—

中川 葉子 ほととぎすがつ印象の変遷

中野 璃子 光源氏の王権をめぐる神話論的考察

西岡絵梨奈 西行法師の恋歌—月に寄り添って—

西川 侑希 『今昔物語集』本朝世俗部に描かれる女性性を持つ妖怪について

西澤明日香 横溝正史「悪魔が来たりて笛を吹く」論
—戦争がもたらした「悪魔」—

西野 遥子 遊行女婦と遊女の社会的地位について

新田 真悠 紫文考

二瓶 亜耶 梶井基次郎論—影が表す内面—

野中 彩奈 「桜の森の満開の下」論
—満たされない女と孤独を抱えた男の役割—

野並 利文 佐藤哲也『熱帯』論—現代版イリアス—

濱口 沙希 恋歌から見る元良親王

濱崎まどか 芥川龍之介「偷盗」主題論

林 健一 歌枕の成立とそのイメージの変遷
吉野のイメージの変化

藤井南海子 芥川龍之介と能楽の世界考

藤原みずき 延慶本『平家物語』の忠快赦免譚

古川貴永子 田山花袋『田舎教師』論
—「田舎教師」における、悲劇の描写—

細田 柗真 寺山修司『毛皮のマリー』論
—蝶から読み解く『毛皮のマリー』—

益川 純夏 謡曲《絵馬》をめぐる

松原 未奈 『雨月物語』から考える上田秋成の理想の女性像

松室 重哉 伊勢集冒頭物語的部分再考
—諸本三系統間の差異に見る祖本継承の方向性—

皆本真結生 『好色五人女』における「おせん」と「おさん」の比較考察

三村 杏子 菊池寛「形」作品論

—内容的価値と「形」に込められた意義から人間と人生を考える—

宮崎 混一

「見越し」入道」論

—伝承における妖怪・化物がキャラクター性を獲得する過程に関する考察—

三代地春奈

『源氏物語』における「対の上」の意義

森田 早貴

義経の女性関係について—『義経記』を中心に—

矢野佳奈子

『花の町』論

—改稿から探る、戦後の井伏鱒二の想い—

山下 舞子

文学の中の牛車

山本 和

村上春樹「世界の終わり」とハードボイルド・ワンダーランド」

—「街と、その不確かな壁」との比較と、長編への変化—

吉岡 理恵

谷崎潤一郎「異端者の悲しみ」論

—「はしがき」から読み解く異端者の意味—

吉田 千花

猫の文学—平安時代から鎌倉時代初期まで—

吉原 萌

愛染明王—尊容と修法の実態—

池田 幸司

石門心学における謡曲について

〈国語学〉

荒川 健

明治期の沈黙記号の位置による文法的考察

猪塚 由樹

岡山方言の「どける」と関連動詞の語彙体系

加来 惟子

江戸時代の漢字遊びについて

—『小野がばかむら誦字尽』の付録を中心に—

川端 千尋

日本語学習者が多用する「丁寧体+「から」」についての考察

河本 明子

驚きを表す感動詞の歴史の変遷

川本 隆史

中・近世におけるオノマトベの変遷

坂本 裕香

「汝」の意味変遷について

—神を彷彿とさせる理由とその経緯—

清水 琢視

高等学校国語科における「聞くこと」の指導

園田 真央

「やがて」「おっつけ」の意味変化

高谷 夏那

児童文学の特徴的な表現の由来と使用実態

竹葉 風沙

日本人の名字に基づくあだ名について

中川 寛之

愛媛県南予地方の方言文末詞「テヤ」

中谷 一陽

中世末期の男性一人称代名詞と「場面」の影響

—『天草版伊曾保物語』『大蔵虎明本狂言』を例に—

永田 淳

新語と流行語のその後

—ユーキャン新語・流行語大賞をもとに—

西原 明穂

「自然」の意味変化

長谷川裕子

困惑を表す感情語彙の意味変化

藤井 志穂

奈良県方言「オトロシ」について

藤原 弘子

接触による新たな方言圏の形成
—アスペクト表現を指標にした神戸・加古川方言圏形成の検証—

二川 桜子

広島県大崎下島の否定条件形を用いた行為要求表現について

松嶋 貴文

日本語中での在来語と外来語の役割
—「チャンス」「機会」「好機」をめぐる—

三原 朝香

名付けの民俗誌

山崎 直哉

大阪における動詞否定表現「〜ヤン」の受容について

◇平成二十九年九月期 国語国文学専修卒業論文

〈国文学〉

高橋 香乃

大手拓次持論—求め続けた真の象徴詩—

◇平成二十八年九月期 修士（文学）取得論文

〈国文学〉

陳 慧慧 『宇津保物語』における琴と中国文化

◇平成二十九年三月期 修士（文学）取得論文

〈国文学〉

木下 響子

吉屋信子初期大衆小説三部作にみる女性の「欲望」
—〈キリスト教〉と〈結婚〉から—

宗

逸凡

武田泰淳「十三妹」論
—作中の民族問題を中心に—

瀧倉 朋世

小式部内侍の研究

ベルチャ・アドリアン

宮沢賢治の作品にみるシャーマニズムの痕跡
—『銀河鉄道の夜』を中心とする解釈の試み—

間中真紀子

『大和物語』の本文考
—鎌倉期の古筆切を中心に—

〈国語学〉

阮 菑

書 断り表現の日中対照研究

築谷 隆志

メディアの変容と「リアル」の意味変化の関係性

辻岡 咲子

日韓における依頼表現の動態

岩佐 実彰

萬葉集における多音節仮名の用法
—枕詞と地名を中心に—

道格由起子

「ちようだい」を中心とした依頼表現の変遷

◇平成二十八年九月期 博士（文学）取得論文

〈国文学〉

彭 妍 坂口裙子文学研究

◇平成二十九年三月期 博士（文学）取得論文

〈国文学〉

岩田 陽子 津村節子文学研究